Ⅱ．シンポジウム

■パネルディスカッション

テーマ:「地方におけるライフスタイルのシフト　～人生 100 年時代の働き方、暮らし方～」

コーディネーター
鵜飼　修　　氏　（滋賀県立大学 地域共生センター 准教授
一般社団法人日本計画行政学会関西支部 理事）

パネリスト
塩見　直紀　氏　（半農半Ｘ研究所 代表）
三浦　雅之　氏　（株式会社「粟」代表取締役）
小林　圭介　氏　（島根県立矢上高校 魅力化コーディネーター）

● 趣旨説明

鵜飼：　コーディネーターを仰せつかりました滋賀県立大学の鵜飼です。2 時間強の長丁場ですが、パネルディスカッションを進めていきたいと思います。

先ほど基調講演で塩見さんに話をしていただき、改めて羅針盤を示していただいて、北極星が見えたのではないかと思います。

このパネルディスカッションは、塩見さんの話を絡めて、今回の研究大会の大テーマでもある「地方におけるライフスタイルのシフト～人生 100 年時代の働き方、暮らし方～」をテーマに話を進めたいと思います。

まず、三浦さんと小林さんに、それぞれ取り組まれている内容を話していただきますが、その前に登壇していただいた 3 名の方に宿題を出したいと思います。

今回のテーマは私が提案させていただき、受け入れていただきましたが、計画行政学会ということで、今回のテーマである「人生 100 年時代の働き方、暮らし方」について、それぞれ最後にコメントをいただきたいと思います。提案でも、施策提言でも結構ですので、そのつもりでご用意いただきたいと思います。よろしくお願いします。

それでは、まず、登壇されている方がどのような取組みをされているのかということを伺って、その後、塩見さんも交えて議論をしていきたいと思います。

● パネリストからのプレゼンテーション

＜「プロジェクト粟」の取組み＞

三浦：　奈良から参りました三浦です。よろしくお願いいたします。

先ほど打合せの時に血液型の話になったのですが、コーディネーターの鵜飼先生は O 型、先ほど話をされた塩見さんは何となくお察しのとおり A 型で、邑南町から来られた小林さんは B 型でした。かく言う私は A 型ですので、きちんと持ち時間の 20 分で終わらせたいと思います。よろしくお願いいたします。

本日、奈良から来られた方も、今までここの関係者以外に私と会った方もほとんどおられないと思います。したがって、意外とアウェイ感があり、ザックリと話をしてもしっかり伝わらないところもありますが、時間も限られていますので、皆さんのお手元に配布資料として、今私たちが取り組んでいることをまとめたものをお配りしています。補足でご利用いただければと思います。

➢ **自己紹介**

自己紹介を話していると持ち時間が終わってしまうので、詳しくは後ほど資料をご覧いただければと思います。ただし、ある程度はどのような人間なのかを知っておいていただかなければなりませんので、簡単な自己紹介をつくってきました。

私は 1970 年生まれの 49 歳です。出身は塩見さんのおられる綾部市の隣の舞鶴市で、家内が奈良の人間ということで奈良に縁ができて、奈良に住んで 26 年になります。

愛用スマホやパソコンの機種等はどうでもよいことかも知れませんが、意外とそのようなところをチェックされる方もいるので、一応、紹介しています。

好きな食べ物として①～④まで挙げていますが、これはすべて気候風土の結晶です。奈良には「古都華」というイチゴがありますし、美味しい地酒もあります。私は農家レストラン等の農業をしていて、酒も飲まないのではないか、肉も食べないのではないかと思われますが、決してそのようなことはありません。奈良は清酒発祥の地でもありますので、美味しいお酒も嗜んでいます。

趣味と言いますと、高校 2 年までプロのサッカー選手になりたいと思っていましたが、才能がないと分かったので、今は趣味のようにして続けています。映画鑑賞も好きですが、特にマーベルが大好きです。「エンドゲーム」を観られた方がこの中にどれだけいるでしょうか。奥に 1 人頷いている人がおられて少し安心しました。スポーツ観戦はバルセロナというチームが大好きで、8 年間、妻と一緒に全部の試合を観ています。その他は格好をつけて読書を挙げていますが、「一番好きな本を 1 つ挙げろ」と言われると「スラムダンク」というマンガを挙げたいと思います。今でもセリフをすべて覚えていて、本のページを開けなくても泣くことができます。マンガしか読んでいない人間だと思われてもいけないので、1 つだけお薦め本として「道歌入門」を挙げています。後の話とリンクしますが、奈良の春日大社の元権宮司が書かれた本です。

そして、相棒ヤギのペーターです。後ほどまた紹介させていただきます。

先ほど塩見さんからとても素敵なキーワードがたくさん出てきましたが、私も奈良らしい座右の銘を 1 つセレクトしています。それが「萬古猶新」です。時代が移っても価値の変わらないもの、時の移り変わりによって劣化しない大切なものがあることを表す言葉で、奈良にはそのようなものにたくさん出会う機会があるので、これを座右の銘にしています。

それで「結局、お前何者だ」と言われると、「プロジェクト粟」の代表をしているということになります。

➢ **「プロジェクト粟」とは**

「プロジェクト粟」とは何なのか、ご存じない方が多いようですので簡単に説明させていただきます。

私は元々社会福祉の研究機関で働いていましたが、脱サラをして、今は 6 次産業で地域づくりをするような仕事をしています。プロジェクト名が「粟」ですが、そもそもの動機になったのが、あるトウモロコシとの出会いでした。今から 26 年前、予防医療、予防福祉を行いたいと考えて、勉強のためにネイティブアメリカンの集落に行ったのですが、そこで見たトウモロコシの種が人生の大きな転機になりました。

医療福祉は制度・法律・テクノロジーを必要としますが、それだけではなく、地域のつながりや家族間での支え合い等もそれを補完するために必要ではないかという結論に至り、それを分かりやすく見せてくれたのがネイティブアメリカンの人々だったわけです。

その結果、脱サラし、23 年前に 2 つの目標を定めて今のような事業をすることになりました。

1 つ目が、奈良の在来作物のサバイブです。全国には伝統野菜と言われるものがたくさんあります。例えば、京都の京野菜や石川の加賀野菜、大阪も最近はなにわの伝統野菜に取り組んでおり、全国的にいろいろな取組みが百花繚乱のごとく始まっています。そういう中で、奈良にも伝統野菜と言える在来作物がありますが、奈良の場合は京都と違って、そういうものが次々に失われていくという状態なので、それをしっかりと次世代にサバイブしていくことが目標の 1 つです。

2 つ目は、私たちがいる「清澄の里」という地域を豊かにしようということです。「自分たちで創造する」というような烏滸がましいことは言いませんが、そのような前向きな取組みに対しては寄与していきたいと考えて、このような事業をスタートすることを決めました。

プロジェクト名を「粟」と名付けたのは、先ほど塩見さんが「種」の大和言葉を説明されたのと同じく、漢字が伝わる以前の万葉仮名で、大和言葉の「粟」の「あ」はすべての始まりを意味し、「わ」はすべてが調和すること、聖徳太子の「和を以て貴しと為す」の「和」と同じ意味で使われているというところから選びました。伝統野菜がなくなっていく中で、それを引き継ぎ、それを始まりとして、広がり、調和していくという、我々が思い描くビジョンに一致する作物として「粟」をプロジェクト名にしたわけです。

この「プロジェクト粟」のフィールド＝私たちが生きている地域は奈良市の精華地区にあります。昭和 30 年に五ヶ谷という村から奈良市に合併した地域で、家の数が約 300 軒、1,000 人の集落です。万葉時代に「清澄の里」と呼ばれていたので、今も観光地名としてそのまま「清澄の里」と呼ばれている、典型的な中山間地域です。

そこで行っている事業が「プロジェクト粟」なのです。

- **「プロジェクト粟」の取組内容**

先ほど述べた 6 次産業を、NPO 法人 清澄の村、五ヶ谷営農協議会、㈱粟の 3 つの組織で運営しています。

「NPO 法人 清澄の村」は伝統野菜の調査・研究・栽培・保存、シードバンクのような取り組み、それから、在来ヤギの保存など、昭和 30 年代に全国各地で見られた中小家畜の保存を行っています。

2 つ目は農業をする組織である「五ヶ谷営農協議会」です。ここで「NPO 法人 清澄の里」で見つけて保存している伝統野菜の種を実際に作付けします。そして、それをすべて㈱粟で買い取り、3 つの飲食事業と、さらに加工品の開発等を行っています。

このように、1 つの組織で 6 次化をするというよりも、3 つの異なる性格を持つ組織を連携・協働させながら 6 次化に取り組んで、地域を活性化しようというのが我々の事業のスキームです。

本当にいろいろなメンバーが関わっています。㈱粟は 37 人のスタッフがいます。NPO は 94 名で、研究者や地域の高齢者から子どもまで関わっています。五ヶ谷営農協議会は、12 軒 20 名の農家の方が伝統野菜の栽培に取り組まれています。

- **農家レストラン 清澄の里 粟**

まずは「農家レストラン清澄の里 粟」です。このようなところにあります。里山にあるログハウスのレストランです。中では地元で採れた野菜を使って、今、20 年商売をさせていただいています。

- **粟 ならまち店**

ならまち店は 11 年目に入りますが、奈良の観光地である「ならまち」の古民家をリノベーションして、伝統野菜だけではなく、奈良の地酒や奈良の畜産を使った料理を、観光客を中心に提供し、魅力を発信していくという店です。

古民家をリノベーションした設えで、自分の好きなものをここに結び付けています。奈良は清酒発祥の地であり、今は30の蔵があるので、様々な地酒の中には皆さんが飲まれているものもあるのではないかと思います。このようなものを提供させていただくのがコンセプトとなっている店です。

➢ **coto coto（コトコト）**

3 つ目は、奈良市との官民協働で運営している事業で、奈良市の元市役所の一角をリノベーションし、「古都奈良からコトを発信しよう」ということで「coto coto」という屋号になっています。

ここは約40席のレストランスペースと、様々な展示やトークイベントなどもできる設えになっていて、官と民の力を合わせて奈良の魅力を発信していくという事業になっています。

その中で、五ヶ谷ショウガという奈良の伝統的なショウガをつくっている方がいるので、この方がつくったショウガを使ったソフトクリームを近畿大学の農学部と開発しています。

また、奈良の在来の「ムコダマシ」という、色が真っ白で餅のような食感を持った粟を使って和菓子を商品開発しています。このように加工品開発の事業も行っています。

➢ **奈良の文化を伝える伝統野菜のカルタ**

ただ、それだけで地域がつくれるわけではないので、広域の事業も行うために、別枠としてNPO で様々な事業に取り組んでいます。

例えば、我々は年間 120 種類ほどの野菜をつくりますが、それを地元のクリエイターの女性が見事に絵画作品として仕立て上げられたので、これを基に食育用のカルタをつくりました。これは、日本の古事記の遊び文化を通じて奈良の文化を学んでいただくツールになります。

他にも、近畿大学等と連携しながら生物多様性を発信しています。伝統野菜が残っている地域には伝統的な文化、景観、さらには生物多様性が残っています。これも塩見さんの話で窺い知ることができたのではないかと思いますが、このようなものをもう少し意識を持って、それこそ塩見さんの言われたA to Z 的に可視化して、保存していくという取組みを行っています。

その中の 1 つが在来種のヤギです。本当は相棒のヤギの話だけで 2 時間くらい取りたいのですが、それは封印して先に進みたいと思います。

➢ **大和伝統野菜の調査と保存**

今回のメインになるかと思いますが、私の活動の 1 つに、奈良の在来作物の調査と保存があります。23 年前に調査をしましたが、それまで奈良県が把握していた品種は 9 種類でした。それが今は 53 種類になっています。いろいろな地域へ調査に行っては在来作物を掘り起こし、同時に食文化も掘り起こしています。我々は民間の NPO のシードバンクとして種を保存し、奈良県のシードバンクとも連携していくという取組みを行っています。

例えば、野迫川村には半分白くて半分緑のキュウリがありますし、観世流の能の発祥の地である川西町には結崎ネブカというとても甘いネギがあり、椿尾ごんぼという風味の良いゴボウもあります。

五ヶ谷営農協議会の会長を務めていただいている阪本さんは教師をされている方ですが、ご家族で写真に写っていただきました。

このように、換金作物というよりも、生活文化のような形で地域に受け継がれてきた伝統野菜を大切にして、地域の宝物として保存していくという活動を行っています。そして、それを本にしたり、県の報告書にまとめたりしながら、伝統野菜をサバイブ、つまり調査して、守って、保存するというのが、今までの私たちの活動でした。

この活動を始めて 23 年になりますが、その内の 18 年くらいがそのような調査と保存の活動でしたが、この 5 年くらいは潮目が変わって

きています。

➢ **新しい７つの風**

最後に少し違う話をさせていただこうと思いますが、塩見さんが最初に選ばれた「半農半X」の本の中に「7 つの風」という素敵なキーワードが出てきます。これは九州地方の広報誌に載っていた言葉だと塩見さんは解説されていますが、それに関連して、伝統野菜を保存してきた中で思ったことがあります。

奈良の宝物、地域資源を守ってきましたが、それ以外のものにも応用できるのではないかと考え、塩見さんの提唱された「7 つの風」のうちの「風格」を「風習」に替えて「新しい 7 つの風」を、これからの暮らしづくりで意識してはどうかといろいろなところで話しています。

「7 つの風」の 1 つ目は、元々その土地が持っている性格＝気候風土です。「風」に「土」と書いて「風土」と表現できます。

そして、その土地の性質に応じた食べ物をつくる営みがあります。その中には清酒やイチゴ、郷土食や伝統野菜があるわけですが、このような食文化を「風」に「味」と書いて「風味」と表現できるというのが 2 つ目の風です。

3 つ目の風は、この風土の中で農業という食をつくる営みが生み出す景色＝Landscape で、「風景」という言葉で表現できると思います。

また、日本には四季があり、さらに細かく二十四節気、七十二候まで分かれます。要するに、四季とうつろいを感じながら自然を上手く活かして生きていく民族の知恵が詰まっている領域であり、「風」に「習い事」と書いて「風習」と表現できると思います。これが 4 つ目の風です。

5 つ目の風は、昔の職人仕事になりますが、これを私は「風物」と表現したいと思います。工芸には人間国宝が手掛ける美術工芸もありますが、そうではない生活工芸のようなものを「風物」と表現できるのではないかと思っています。

今述べた 5 つの風の次が生活文化です。私自身「将来どのように生きていきたいか」というと、実は今の生き方と何も変わりません。なぜなら、ワークバランスが私の中で存在しているわけでもなく、1 日の中で、遊ぶことも、学ぶことも、働くことも、すべて渾然一体、一元化しているからです。それを昔の方は「風」に「俗」と書いて「風俗」と表現しています。これが 6 つ目の風であり、第 2 次大戦後に海外から様々な学者が日本文化の調査に来た時、口を揃えて「日本人は素晴らしい」と言った部分です。

最後に、この 6 つの風の中で培われる価値観や心持ち、人間の生き方のあり様みたいなものを「風」に「情」と書いて「風情」と表現できるのではないかと思っています。

まだ自己紹介なので、この後のディスカッションでさらに深めていきたいと思いますが、人生 100 年時代に生涯現役ということで、ワークライフバランスを良い意味で無視して、一元化していくということ、それから、地域で生きていくために「7 つの風」を意識していくことが大切だということを最後に少しお話して、この後、これを広げていくことができればと思っています。

鵜飼： ありがとうございました。それでは、続いて小林さんにお願いします。

＜邑南町のまちづくりと矢上高校魅力化事業＞

小林： 皆さん、こんにちは。先ほど三浦さんからアウェイという話が出ましたが、一番アウェイは私ではないかと思います。今、コックコートを着ていますが、私はシェフではありません。実は、昨年、島根県立矢上高校の生徒や先生たちと一緒に「食と農研究会」という部活的なものをつくりましたので、そのユニフォームということでコックコートをつくりました。これは勝負服だと思っているので、本日はこれを着て来ました。

私のプロフィールはお手元の資料をご覧いただきたいと思いますが、実は今日、東京で行われる矢上高校の説明会を飛ばしてこちらへ参りました。ですから、本日の私のミッションは、皆さんに邑南町のことと矢上高校のことを知っていただくことだと思っています。是非、この学校紹介冊子を持ち帰って、お孫さんやお子さんに渡してください。あるいは、お友だちに中学生がいれば勧めてください。

本日は、邑南町のまちづくりについて話をするという依頼を頂きましたが、本来、一番話せる人はそれについて本を書かれた寺本英仁さんです。私は代弁することになりますので、ごく一部しか伝わらないかもしれません。もっと深く知りたいと思われる方は邑南町へお越しください。その時には私も対応させていただきます。

それで、まずはその話をさせていただき、その後に自分の移住の経験、仕事のことと暮らしのことについて話したいと思います。

➢ 漢字変換できない「邑南町」って、どんな町？

その前に、漢字変換できない「邑南町」ってどんな町なのか、簡単に説明したいと思います。

漢字変換できないというのは、スマホで「オウナンチョウ」と入力しても漢字が出ないという意味です。なぜかというと「オウナン」ではなく「オオナン」だからです。ここに引っ掛かる方がいて、新しく邑南町に赴任した先生からよく「カーナビに出ない」と言われますが、「オオナンチョウ」と入力しなければ出ません。先ほどオオサンショウウオの話がありましたが、オオサンショウウオもいますので、オオサンショウウオとオオナンチョウをかけて「オオナンショウ」というゆるキャラもいます。

邑南町は中国山地の中山間地域にありますが、広島から 1 時間余りの距離にあり、県庁所在地の松江へ行くのに 2 時間半～3 時間くらいかかるので、広島の方が近いというところです。人口は約 1 万人で、高齢化率が 43%です。日本の未来予想では 2060 年以降に日本は高齢者が 43%になると言われており、島根県全体がこのくらいの比率なので、島根県を見ると日本の未来が分かると言われます。

また、邑南町はその風景が「日本のスイス」と呼ばれています。誰が呼んだのかは分かりませんが、石碑にそう書いてあります。本当にそうなのかどうか、スイスの風景写真と比較すると、やはり似ていると思います。

於保知(オホチ)盆地の中にあり、その地名からオロチ→ヤマタノオロチが連想されますが、ここも神楽が有名です。実は奥出雲の方がヤマタノオロチの原型と言われますが、たたら製鉄があったこの地も、もしかするとヤマタノオロチの舞台だったのでないかと言われています。

林がありますが、鉄穴(かんな)流しの跡地です。江戸時代の末期に黒船が来た時、ここもその影響も受けました。この地では鉄穴流しでたたら製鉄によって鉄をつくり、日本全国に出していましたが、黒船が来て海外からの安い鉄が入って来て、たたら製鉄産業を駆逐してしまったのです。それで、この地の人々はいかにして生きていくかを考えなければなりませんでしたが、当時からたたら製鉄と農業は親和性が高かったので、それによる農業を推し進め、交通にも力を入れていきました。

そして、もう 1 つ大事なこととして、教育に力を入れました。江戸時代の末期からこの辺りには、私塾で学校が建ちました。それが今、私が務めている矢上高校の原型になったのではないかと言われています。

ちなみに、たたら製鉄に関して言いますと、ここには出羽(いずわ)という地区があり、出羽には刀鍛冶の職人が今も 1 人おられます。かつてそのような職人が全国に散らばって行ったのですが、その行き先に大阪の堺がありました。一説では、職人の技が生まれた出羽を「でば」と読んで、堺で出刃包丁の原型ができたのでは

ないかとも言われています。一説なので真偽の程は分かりませんが、地元の山陰中央新報社の記者が伝統や歴史を調べて書いています。

➢ **邑南町のまちづくり　～A 級グルメ構想**

まちづくりについては、ここでは、A 級グルメのまちづくりを行っています。A 級グルメ立町で、Google で「邑南町」と検索すると最初に A 級グルメが出てくるという考え方に立っています。

2 年前、NHK の「プロフェッショナル仕事の流儀」に、A 級グルメの考え方でまちづくりを行った寺本英仁さんが取り上げられ、それをきっかけに「ビレッジプライド」という本を書かれました。A 級グルメは高級グルメではなく、ここでしか味わえない食や体験を意味しています。邑南町で作られている農産物は小ロットなので、東京や大阪に出荷しようと思っても、レストランが買ってくれません。それなら、逆にこちらへ来て食べてもらおうという発想です。

それは、最も美味しい食材が地方にあって、その美味しい食材を使って美味しい料理をつくる、そういうヨーロッパのミシュランの星が付いたレストランがまさに地方にあるという考え方です。高級なグルメを出して、地域の外から人を呼んでお金を集めるという考え方ではなくて、元々、田舎で作っている農産物はとても美味しいので、それにもう一度自分たちで気づくことが一番大事だという考え方がA級グルメの発想なのです。

地域の誇りを育むところから「ビレッジプライド」が生まれ、広島から、あるいは東京から、大阪から、邑南町へ A 級グルメの食材、料理を食べに来るのです。そうなると、その食材を作っている農家の方は喜んで「またつくりたい」「また自分の野菜を使って料理をつくってほしい」と思うようになります。そのように、そのビレッジに対して誇りを生むことが一番大事なのです。町民に、自分たちのまちに誇りを持ってもらうことが一番大事なことではないかと思っています。

先ほど水田の風景がありましたが、ここでは米を作っています。しかし、米を米のまま出しても売れないので、その米を加工して「角寿司」という郷土料理に変えて、弁当として販売しています。これを道の駅に出して、年間 800 万円の売上げを出した人もいます。「70 歳で売上 800 万円」という実例があるわけです。

都会の人に聞いた話では、定年退職した高齢者が平日にどこに行くのかというと、ハンバーガー店でバイトをしたり、食事をしたりしているそうです。しかし、邑南町は違います。自分で農業をして、作物を単に販売するのではなく、それを商品に変えて販売し、そこで稼いだお金を町内にあるA級グルメのレストランで使うのです。

例えば、「AJIKURA」という町立のレストランがあります。今は民間の経営になっていますが、ここに毎朝、農家の方が自分が作った野菜を持ち込み、それを美味しい料理にしていろいろな人に食べてもらっています。

この「AJIKURA」の近くには、昨年の春にリニューアルし、今年の春にもリニューアルしたレストラン「香夢里(かむり)」があります。そこでもまちの食材を使った美味しい料理を提供しています。

そのように、地元の方が自分のまちに誇りを抱き、自分のところでつくるものが一番美味しいと思ってそれを購入します。それで 1 万円多く買い物をすると、1 万人の町なので 1 万人×1 万円＝1 億円のお金が域内で流通することになります。それで、1 人当たりの年収を 300 万円で計算すると、1 億円÷300 万円で 33 人分の雇用が生まれます。つまり、ここで自分たちのまちにあるものを買って、地域外に出て行かないお金が増えることによって新しい雇用を生み出し、そこに地域おこし協力隊が入ってきて仕事

をする、あるいは、商品開発をするという仕組みをつくっています。

このＡ級グルメに関する話は「ビレッジプライド」という本に全部書かれています。「ビレッジプライド」はブックマン社から 1,600 円で発売されていますので、購入していただけると嬉しいです。これを買っていただくと印税が邑南町の税収に入りますので、是非、邑南町の税収に貢献していただければと思っています。

➢ **矢上高校魅力化事業**

話は変わりますが、私は、今、高校教育の現場にいますので、その状況もお伝えしたいと思います。

都道府県別に公立の小・中・高が 15 年間でどのくらい減ったのか、統廃合されたのかを示す文科省のデータがあります。これによりますと、最も多くの学校が廃校になったのは北海道で、2 番目が東京です。東京は人口は増えていますし、若い人も増えていますが、何よりも 75 歳以上のお年寄りが増えているので、実は子どもの数は減っているのです。

そのデータの中で島根県は 28 位となっており、小学校 102 校、中学校 20 校、高校 7 校が減っています。今、邑南町には小学校が 8 校あり、1 番小さなところは生徒数 10 名です。それが残っています。もちろん議会では「統廃合しないのか」と言われていますが、小学校や高校がなくなるとどうなるのかというと、実は大変なことになってしまいます。

まず移住先に選ばれなくなります。自分に子どもがいたとして「どこに移住しようか」と考えた時に、そこに小学校がなかったら、中学校や高校がなかったらどう思うでしょうか。そこに移住したら、子どもはいずれ外に出てしまいます。そうなると最初から移住先に選ばれないし、選択する土俵にも上げられません。

しかも経済が回らなくなります。教育は一種の景気対策にもなるのです。学校をつくる時には何億円というお金が動きますが、そのお金が地元の企業に行くので、学校がなくなっていくと、一時的には財政が良くなるかも知れませんが、今後のことを考えると経済が回らなくなるのです。

その上、将来の担い手がいなくなります。過疎という言葉は島根県で生まれたのですが、このままで高校がなくなると本当に困るので、高校の魅力化を図って高校を存続し、かつ生徒数を増やそうという魅力化事業を行っています。これは島根県が隠岐島前高校のモデルを真似て、全県に広めよう、特に離島、中山間の高校に広めていこうとしている事業で、邑南町でもこの事業がスタートしています。

私が所属している矢上高校は、昨年 70 周年を迎えましたが、普通科と産業技術科の 2 つの学科があり、1 クラス 30 名×3 クラスの定員です。現在、全校生徒数 238 名で、都会の感覚からすると真っ先に統廃合の対象になると思いますが、統廃合せずに町の力も借りながら活動しています。「腕に覚えのある人間、筋金の通った人間、思いやりのある人間」というのが校訓ですが、これは 70 年前に初代校長がつくった言葉です。

実は、この高校の校舎は町民が山を削り、木を切って建てたものです。近くに県立の川本高校があったために、県から「近くに 2 つの高校があっても意味がないので、つくるのであれば建物は自分たちでつくりなさい」と言われ、町民たちは自らの手で矢上高校をつくりました。それを県が県立高校に移管したという歴史が、70 周年にも紹介されましたが、明治の頃からこの学校の原型はあったと言われています。

魅力化事業の内容については、時間の関係で簡単に紹介します。なぜ県立高校を町が支援しているのかということもありますが、矢上高校には邑南町役場から金も人も出しています。人というのは「魅力化コーディネーターの派遣」

ということで、私が行っています。

生徒募集のために、前述のように、本日、東京で「地域みらい留学」の説明会が行われます。先週も大阪の天満橋のOMMビルで開催されました。そのように全国で「地域みらい留学」の説明会を行っていますが、北海道から沖縄まで55校が来ています。そのように県外でも生徒募集を行っています。

それから「交通／寄宿舎のインフラ整備」も行っています。寄宿舎＝寮ですが、島根県は寮が一番多い都道府県で、その寮も邑南町が建てています。

また、私は「ここでしか学べないカリキュラム」づくり、ここでしかつくれない学びをつくっています。それにより、単に生徒を集めるだけではなく、入ってきた生徒がそこで本当に学びをつくって、学んで卒業し、次に行った先で邑南町や矢上高校の魅力を発信して、また邑南町へ戻ってくればよいというのがこの魅力化事業の本質です。

学校の様子を見ていただくと、まず、農場があります。そして、周辺に柵がなく、校庭と地域の境がありません。島根県ではそのようなところは結構あります。ハウスもあります。車で5分くらいのところに第2農場があり、牛舎に石見和牛が 15 頭います。仔牛を育てて出荷していますが、生徒も黒毛和牛を育てています。人工授精の研修会も行っています。先日、仔牛が1頭生まれたので今は16頭です。女生徒も1人で牛をひいています。

生徒は農場で野菜や花も育てますが、それらを使ってジャムやピクルスも作っています。生産から加工、販売まで行っているわけです。私はこれを6次産業の小さな企業でできるのではないかと思っています。先ほど「70 歳で 800 万円」という話をしましたが、高校生の時から、そのように自分の土地にある農産物を加工して販売するという経験をするということです。その1つに「矢高味噌」があります。すべて有機農法で作り、1kg400円で販売しています。

このような取組みを通して、今、私が行っているのは、「“食と農” による学校ブランド化」です。普通化と産業技術科の2つの学科があり、産業技術科は農業などをやるところが多いので、こちらを目指して県外からも生徒が来ますが、普通科でも「食」のことを学びたいという生徒は少なくありません。邑南町がA級グルメのまちということで、邑南町出身の生徒が普通科に入ってきて、「食」のことを学んでいます。

特に普通科の2年生は「食と環境」をテーマに、総合的な学習の時間が、次の学習指導要領では総合的な探求の時間になりますので、自分のあり方、生き方と地域のことを一緒に考えるようになります。“私たちの生活と SDGs” ということで、持続可能な開発目標と自分たちの生活を一緒に考えていくのですが、その1つのキーワードが「食」であり、環境や農業ではないかと考えて、今、生物の授業や家庭科の授業、公民の授業と一緒に総合の時間をつくっているところです。

産業技術科は野菜、畜産、工業を全般的に学び、販売も行いますが、その中で、先ほど伝統野菜の話があったように、邑南町でブランドの野菜を作っていこうと考えています。これについては、高校生が「邑南野菜」というブランドをつくってはどうかと邑南町に提案し、邑南町もそれを受け入れましたので、今、邑南町でつくっている有機野菜は全部「邑南野菜」と呼ぼうと動いています。

- **私の暮らし**

私がこのような暮らしをするようになったきっかけは、先ほど説明があった藤原和博先生の話でした。藤原先生は、2 年前まで奈良市立一条高校の校長を務められ、その前は杉並区立和田中学校の校長で、その前はリクルートにおられて民間校長をされていますが、その人が「藤

原先生、これからの働き方について教えてください。」という本を書かれました。キングコングの西野さんや、ホリエモンこと堀江さんも良いと言われていますが、これは 1 万時間を超えると誰もがその道のプロになる、100 人に 1 人の存在になれるという考え方です。そこから私は、教育の世界に飛び込んで週 50 時間×50 週×6 年以上働きましたので、今、教育の分野、コーディネーターの分野では 100 人に 1 人の存在になれているのではないかというのが実感です。

そして、2 歩目にどこへ進もうかと思った時に、「どこでも働くことができる」という発想が生まれました。IT を使ってデザインすること等ではなく、全く知らないまちに行って、そこに浸って仕事ができるような人材もこれからは求められるのではないかと思ったのです。それまで、広島出身で大学卒業後は関西の方で働いていたので、邑南町のことを何も知りませんでしたが、だからこそ自分のことを誰も知らない邑南町でどれだけ自分が勝負できるのか、挑戦したいと思いました。そして、7 時間×7 日で週に約 50 時間働き、約 4 年間過ごしたので、50 時間×50 週×4 年間＝1 万時間で、これも 100 人に 1 人の存在になれているのではないかと思っています。

それで今、3 歩目はどこへ進もうかと、まさに模索しているところであり、「食と農」ではないか、あるいは、福祉の分野で「食と福祉」の掛け算ができるのではないか等、いろいろと考え中です。

元々、なぜ邑南町に行ったのかというと、自分の信用や価値を高めて、教育の分野でどこでも働くことのできる人材になりたいと考えたからです。邑南町へ行く前、職場で隣の席にいた上司が脳梗塞で倒れてしまい、その結果、仕事が全部私に回ってきました。そういう事態になって、自分にとって一番大切な価値観や、自分にとって一番大切なことは何かということを改めて考えたのです。大切なのは本当に仕事なのか、それとも生まれ故郷なのか、都会で暮らすことなのか、あるいは、家族かも知れないし、友人かも知れません。いろいろなものがある中で、自分にとって一番大切なものを見つけていくわけで、そのためにどこの土地に行っても自分の特技で切り拓いていける力を身につけようと思ったのがきっかけだったわけです。

私は大学 4 年の時に 3 ヶ月間、インドネシアでインターンシップをしましたが、グローバルビレッジというお祭りのようなものにも参加する等、日本人同士で群れるのではなく、自力で日本人以外の知り合いを作って、そこで貢献していきたいと考えていました。

したがって、「暮らしは○○」「仕事は△△」と切り分けるのではなく、暮らしと仕事はイコールであり、暮らしも仕事もすべてが自分の付加価値を高めるためのものと捉えています。そして、その原点が自分の価値観、自分が一番大切にしたいことを突き詰めているところではないかと思っています。

私は、今朝 8 時に新幹線に乗りましたが、車内で「新幹線はなぜ『こだま』ができたり、『のぞみ』ができたり、いろいろと開発されたのか」と考えていました。そして、思い付いたのが、開発者は遠くにいる自分の家族に一刻も早く会いたかったから、新幹線を開発したのではないかということでした。そのように自分にとって超個人的な思いや大切なものは、誰かを動かす力になるのかもしれません。「地域のため」という思いはもちろんありますし、「子どもたちのため」「学びのため」等、いろいろな動機はありますが、そのようなことを一切除外して、一番大切なものは何なのか、そのために何ができるのかを考えていくと、きっとそれは結果的に社会のためにもなるし、地域のためにもなるし、子どもたちの学びにもつながるのではないかというのが、私の考える暮らし方や働き方、つまり

生き方だと思っています。

鵜飼： 登壇者についてご理解いただけたのではないかと思います。

難しいテーマを提案しましたが、いろいろと素敵な言葉をいただきました。

三浦さんの 7 つの風の話を、できれば、もう一度教えていただけますか。

三浦： 順番があって、まずは気候風土の「風土」、2 番目はそこから生まれる「風味」、3 番目はその 2 つが重なってできる「風景」です。4 番目は四季の中で生きていく知恵で「風習」、あとは生活工芸で「風物」、「風俗」、最後が「風情」です。

鵜飼： ありがとうございます。

「ワークライフバランスは気にしない」という話をされていましたが、それは三浦さんだからできることなのでしょうか。会場に聞いてみたいと思います。(会場に対して)ワークライフバランスを気にしない方は挙手してください。どうも登壇している 4 人だけのようで、私も全然気にせずに、したいことをさせていただいて、それで給料をいただいているわけですが、会場の皆さんはそのように思っていないようです。これは、どうすればよいのでしょうか。

三浦： できないことにはできない理由があるので、それをお伺いして……。どうすれば良いかというのはとても言えません。

鵜飼： 分かりました。無茶な振りをしてしまいました。

● 意見交換

＜人生 100 年時代の働き方、暮らし方とは＞

鵜飼： 本日のテーマは「人生 100 年時代の働き方、暮らし方」と設定されていますが、つまり「人生 100 年時代になった」という 1 つの大きな背景があるわけです。私はいろいろとまちづくり活動などをやってきて、今は教員もしていますが、50 歳になったら引退して縁側でお茶をすするという暮らしを目指してきました。しかし、いつの間にか「人生 100 年」という全く違う話になってしまいました。

これまでは「人間 50 年」という話で考えていました。それは別に 50 歳で辞めるという話ではなく、現役的な活動を後進に任せることができればよいという意味です。ただ「人生 100 年」という話になれば、どうすればいいのかという話になってしまいます。

三浦さんは先ほど「このまま 100 歳まで行く」と言われましたが、いかがですか。

三浦： 行けるところまで行くというのは、それは神様が決めることだと思います。

鵜飼： 神様が決めることで、行けるところまで行くという話ですが、塩見さんも「1 人 1 研究所」で行けるところまで行くという話でしょうか。

塩見： 私は英語では「inspire＝鼓舞する」という単語が一番好きで、セルフインスパイア、あるいは自己学習能力でも構いませんが、それがとても重要だと思っています。他者は自分のことを鼓舞してくれないと思っているので、自分で鼓舞するしかないわけです。

鵜飼： 他者は鼓舞してくれないのですね

塩見： 人は誰しも忙しいので、自分のこと以外はなかなか関心がないと思います。ですから、自分が自分に栄養を与えるしかないので、セルフインスパイアが重要だと考えています。

私は大学４年の頃から良い言葉があれば言葉貯金をしているのですが、その言葉貯金が満期になっている状態です。

鵜飼： 何個くらいあるのですか。

塩見： とても数えられません。大学の授業では、冒頭に私が選んだ授業に合う言葉を 10 個ずつ紹介してスタートします。

鵜飼： 私は先ほどの「7 つの風」も覚えられなかったので、10 個は多いですね。

塩見： ガンジーの言葉から金子みすゞまでありますが、その目的はインスパイアを自分でするしかないという点です。やはり、人は忙しいので自分が自分の面倒を見るしかない、インスパイアを自分ですることはとても重要ではないかと、人生 100 年ということで、鵜飼先生のおかげで改めて気づきました。

鵜飼： ありがとうございます。インスパイアするためにはどうすればよいのでしょうか。

塩見： 「センス・オブ・ワンダー」という言葉になりますが、「センス・オブ・ワード」とか「センス・オブ・～」というようなアンテナが立っているのかどうか、問題意識があるかどうか、そこに帰ってくるのではないかと思います。

鵜飼： 縁側でボーとしてお茶をすすりたいのですが、そういう人はどうすればよいのですか。

塩見： 経営者が一番欲しい時間は１人の時間だという話を聞いたことがあります。三浦さんと私は、恐らく農的な時間が結構良い時間になっていると思います。

鵜飼： 三浦さんもそうですか。

三浦： 仰るとおりだと思います。

塩見： 田んぼで１人農作業をしていると、頭上のヒバリの声や風などが五感を刺激してくれるので良い閃きがあります。ただ、三浦さんが閃けば閃くほど従業員は忙しくなって大変ではないかと思います。逆に、私は基本的に忙し過ぎることはなく、かと言って暇過ぎることもなく、良い感じの塩梅があって、そこに農的な時間がかなりプラスになっているのではないかと分析しています。

鵜飼： 「半農半 X」の最初の著書にも、農と関わることが大事だということを書かれています。三浦さんも社長としてインスパイアするためには、１人になる時が大事ですか。

三浦： 優秀な方はそういうことを意図的に行いますし、仕事のできる方は休み方も上手です。これは、アスリートの世界では当たり前のように証明されていることです。常に馬車馬のように働くことは生物学的に難しい。暮らしも仕事も一元化している壇上の４人は、自ら好んでやっていることなので問題はないと思いますが、そのような人たちは「好き」と感じる領域が広いのではないかという気がします。

それからもう１つ、例えば、仕事をしながらも休んでいるとか、よく言われる「遊学働の融合」で、遊びの中に学びがあるとか、働く中に自己成長があるということです。先ほど小林さんが言われたように、「労働は苦役で、趣味は楽しい」というようなカテゴライズをされていない部分を、よく働いている方は何かの方法で見つけていると思います。その一例が、塩見さんの言われたことではないかという気がします。

鵜飼：　小林さんはそれができていますか。

小林：　私は、農業はしませんが、「食」ということで言えば家に帰って料理はしますし、農業という観点で言えば、実は生徒が校内販売のために学校に野菜を持って来るので、作った人、作った価値の分かる野菜を手にすることができます。

例えば、都会で仕事をしていて野菜を買おうとすると、スーパーへ行って、誰が作ったのか分からない野菜を買うことになります。そこに人の温もりはあまり感じられないと思います。それが校内なら、生徒がいますし、その生徒が作ってくれた野菜だと分かるものを食べることができるので、野菜の力はもちろん、人の力ももらっている、作った価値のようなものを自分ももらっているという感覚があります。先ほどの「センス・オブ・ワンダー」ではありませんが、この野菜の価値は何なのか、どんな人が作ったのか、どんな作り方をしたのかというのを感じられるのが、邑南町に来て良かったところではないかと思っています。

鵜飼：　まったく違う話かも知れませんが、私は 13 年前に滋賀県へ来て納屋で暮らしています。納屋ですから中も外気温と一緒です。母屋には水道も電気もありますが、納屋にはありません。そのようなところで寝泊まりしているわけですが、そうすると身体が鍛えられます。冬には部屋の中がマイナス 2℃になりますが、外から帰って来ると暖かいと感じます。身体が鍛えられるのか、騙されるのか、環境適応能力があると感じるわけです。都会ではクーラー病で身体のコントロールもよく分からない状態になっていましたが、滋賀に来て環境に適応するような能力が戻ってきたと思います。

そのような人間性みたいなものが、「人生 100 年時代」と言われる中でも大切ではないかと、話を伺いながら思った内容です。

＜人生 100 年時代に憧れるライフスタイル＞

鵜飼：　話を変えますが、今、塩見さんは 53 歳、三浦さんは 49 歳、私は 50 歳で同じ世代、ガンダム世代です。小林さんは何歳ですか。

小林：　31 歳ですが、昭和生まれです。

鵜飼：　無理に仲間に入らなくても構いません(笑)。何が言いたいかというと、我々50 歳の世代や、もっと年配の方は「人生 100 年時代」と言われて戸惑うところもあると思いますが、そういう年配の方々、ベテランの方々の暮らし方に向けて、若い人たちの暮らし方から得られるヒントのようなものがあるかということです。小林さんは高校生に、私は大学生に日々対応していますし、三浦さんも若い社員に対応されていますが、「人生 100 年時代」にはどのような暮らし方があるのでしょうか。

言い換えると、自分がもう少し年をとった時に、どのようなライフスタイルにしたいのかということです。変わらないということはなしにして、どのようにしたいのかという話です。研究所の話もなしです。壇上の風変りな 4 人とは違う、普通の人たちの暮らし方として、どのようなヒントがあるのかということを聞きたいと思います。

質問が曖昧で分かりにくいかも知れませんが、例えば、私の知っている人で、80 歳くらいでとても切れる方がいます。その人に話を聞くと、毎日歩いていることと、役職が 30 くらいあるのでボーッと生きていられないということでした。それでシャキッとされています。私よりもはるかに記憶力も良くて、私は全部忘れているのですが、前回の議事録を憶えているという凄い方です。それが地域でいろいろと活動されている方のライフスタイルです。

そのような憧れるライフスタイルのようなものを伺った方が分かりやすいかも知れません。

三浦さん、いかがですか。

三浦： 自己紹介で話をさせていただいたとおり、2 つの店は奈良の中心街にあり、もう 1 つの農家レストランは田舎にあります。それで、田舎とまちの両方と深く、広く付き合いをさせていただいていますが、そこで感じるのは、100%とは言えないものの、田舎の方は元気です。服装に気を使うジェントルマンは田舎では少ないのですが、皆さんとても元気です。私が付き合っているところでは、同じ歳でもまちの方は「膝が痛い」「腰が痛い」と言いながら疲れている方が多いような気がします。この違いは何かというと、田舎の方はずっと身体を動かし続けているということが 1 つのポイントだと思います。

憧れる人はいろいろいますが、素敵だと思うのは、生涯現役という形で常に当たり前のように生業をこなしている方です。恐らく人間は歳をとった時に、そのようなものが残ることによって深みが出ますし、昔で言う長老のように知恵袋として扱われるようになります。つまり、歳をとるためのストロングポイントがそこに現れてくるということです。逆にそれがなければ、ただ体力が衰えるだけ、気力、記憶力が衰えるだけになってしまうので、そうではなく、歳をとるほど深みを増していくような人生を送っている方、それが当たり前になっている方は魅力的だと思います。

我々の長老にもとんでもない人がいます。85 歳の男性ですが、裸眼で新聞を読みますし、腹筋が割れています。本当に凄い人ですが、別にジムなどには行かれていません。

鵜飼： 塩見さんはいかがですか。

塩見： 年配の方にはあるもので何かを作れる力、レヴィ=ストロースの言う「ブリコラージュ」の力があると思いました。例えば、福井県のある村へ行くと、S 字フックのような形の枝がいろいろなところに掛けられています。囲炉裏の棒がヤカンを掛けられる形になっているように、村人は山で S 字の枝を見つけてきて、そのままきちんと引っ掛かるように使っているのです。それをあちらこちらに掛けてあり、庭先にスコップを掛けておいたりしています。

私は「山へ行くと手ぶらで帰らない」という考えがとても重要だと思ってきましたが、まさに何か拾って帰ってきているわけです。それはレヴィ=ストロースが言っているブリコラージュで、すぐには活用されなくても「いつか使えるだろう」と思って、今あるもので何かを作るというセンスを村人は持っているということです。現代人はすぐにホームセンターや 100 均ショップで購入しますが、それを自ら調達できる能力はとても素晴らしいと思います。

また、村人が村人を評価する時の一番の評価ポイントは、「働き者かどうか」ということです。それに気付いて、雨の日でも合羽を着て農作業をしていると「頑張っているな」と言われます。

しかし、それが村人を苦しめてきた面もあります。上の世代は雨が降るとようやく休めるというくらい大変だったらしいのですが、やはり働き者を評価することは忘れてはならないので、スローライフで地方に入っても、働き者の面と一服する力を上手く使い分けることが必要だと思います。現代の農作業は一服しないですぐにトラクターで耕してしまいますが、「一服しない力」はダメだと思います。

鵜飼： 一服する力とはどういう力ですか。

塩見： 一服することによって 100 年先を考えるような時間があったと思いますが、それがな

くなってしまっているので、一服する力と働く力の使い分けが重要だと思います。

鵜飼： 新しい本が書けますね。

塩見： 三浦さんに書いてもらいます(笑)。
しかし、そういうものを先人から感じます。ついでに言うと、若い人から感じる力もあります。

鵜飼： それは後ほどお願いします。先に小林さんの話を伺いたいと思いますが、憧れる年配の方はどういう方ですか。

小林： それは、ここにおられる方々には憧れます。

鵜飼： もっと上の世代の方です。

小林： 今、高校生とも接していますが、ご指摘のように田舎の方は元気です。私は逆に、一服するというよりも、例えば、今 80 歳の方が 90 歳の未来、つまり 10 年後の未来を予想しているかというと、してないような気がします。それは悪い意味ではなくて、日々の暮らしに満足しつつ、できることをできる範囲でやっているということで､変に大きなことをしようとか、世界を驚かせてやろうというようなことではなく、粛々とその日々を過ごされているところが格好良いという気がします。

鵜飼： 野望はあるかも知れません。

小林： あるかも知れませんが、それを表に出さないで、日々、粛々と過ごされているところは格好良いと思っています。

鵜飼： 私の知っている年配の方にも「俺はもうダメだ」「明日にはいないから」などと言いながら、翌朝には元気に農作業へ出て行くという人はたくさんいます。

小林： ただ、土地によるものはあると思います。私の生まれ故郷は広島市安佐北区の高陽町ですが、店舗等が全くない住宅街なので、そこに入ってしまうと引きこもってしまって､多分、外に出ないと思います。人と接しないし、働く場所もありません。先ほどのライフスタイルのワークライフバランスではありませんが、自宅から半径 100m のところに仕事があるような暮らしであれば、生きがいのようなものが見つかると思いますが、仕事は広島市の中心街にあって、そこから電車で 20 分行ったところに家があると、恐らく定年退職後は切り離されてしまいます。私の父がそうです。家に引きこもってしまい、ジムに行ったりはしますが、生産活動をあまりしていないので、頑張ってほしいと思うところはあります。

鵜飼： 憧れる人はいますか。

小林： 私は I ターンですが、地元には素晴らしい方が多いと思います。

鵜飼： 小学校に農産物を入れておられる、農業をされている方は年配の方ではありませんか。

小林： 農家の方が入れてくれますが、皆元気です。

＜人生 100 年時代に向かう若い世代への要望＞

鵜飼： 次は、若い人たちにどのように 100 年を生きてほしいかという、要望を伺いたいと思います。

三浦： 人間らしく生きてほしいと思います。

そういう意味では、邑南町の高校の初代校長がつくられた校訓が素敵でした。「筋金の通った人間」。今、そういうことを言える人はいません。簡単に言えば、努力を惜しまず、忍耐力もあって、簡単にはブレないような生き方をする、手先の器用な生き方ではないということを、多分、言われているのだと思います。70 年前の言葉が未だにそのまま使われていることも凄いことですし、面白いと思います。

奈良県の話をしますと、奈良で一番大きな村は十津川村ですが、世界でも一番大きな村で谷瀬の吊り橋などがある村です。そこからたくさんの方が北海道の開拓に行かれ、今そこがまちになり、新十津川町になって、今でも母村との深い交流があります。

十津川村を素敵だと思うのは、陸の孤島と言われている大変な山間地域であり、その中で生きていくこと、生きることが最大の目標となっていることです。もちろんその中には楽しいことも含めていろいろなものがありますが、その十津川村が提言されているのが「一致団結」とか「不撓不屈」等であり、それを村の目標、人間としての目標にされています。今も十津川村の HP を開くと出てきます。

こういうところに人間の根源のようなものを考えさせられます。今、私も塩見さんもインフラが整備されたところで「農業をやっています」と言っていますが、所詮は先人が開墾されたところを引き継いできただけなので、そういうものをゼロからつくって来られた方々のそれが人間の力だと思います。

それはきれい事だけではなく、もう 1 つ殻を剥いたところで、本当に困った時にどうするべきかを考えなければならないのですが、今の日本では、東北や阪神の震災で被災された方、あるいは原爆を落とされた広島、長崎の方、戦争を体験した方でなければ、そういう問題をなかなか実感できないかも知れません。もう一度人間の根源的なところまで届くような力を自分たちの生きている中で思い出せれば、濃い人生になっていくのではないかと思います。別に「苦労しろ」という意味でありません。

鵜飼： 不撓不屈の精神という言葉は久しぶりに聞きました。

塩見さんは大学生といつも接しておられますが、どうですか。

塩見： 大学だけではなくて、例えば、講演を聴いてくれる学生たちに対して、私がこの 10 年ほどで感じているのは、大学生は 20 歳くらいで私は 50 歳ですが、私が 50 年かけて考えたこととそれほど違わないことを、今の高校生や大学生はすでに考えているということです。

鵜飼： 例えば、どのようなことですか。

塩見： 時代の意識などです。これは驚きます。昔ベストセラーになった梅田望夫さんの『ウェブ時代をゆく』に書かれているように、今、世の中はインターネット等も含めて高速学習をしているので、歳の差はこれだけあっても、結構同じことを考えているのです。

ところが、今、その高速学習の果ては出口のところが大渋滞を起こしています。サミット中の大阪のような大渋滞です。そして衝撃だったのは、梅田さんが「そこから先は『けものみち』である」と書かれていたことです。そういう意味で、若い人は同じところに到達はしていますが、そこから先の「けものみち」をどのように生きるかがとても重要であると書いていて、読む人に衝撃を与えました。

私が今感じるのは、世の中が皆、ほぼ同じことを考えているということです。最近読んだ本の中に「正解のコモディティ化」という言葉がありました。衝撃を受けた言葉で、山口周さん

の言葉です。すべて分析して同じ答えにたどり着くということで、まちづくりもそうですし、商品開発も、コンテストも大体皆同じです。

今、福知山公立大学で田舎力甲子園の応募作品を審査中ですが、ほぼ同じ答えが出されています。子ども食堂案や、商店街のシャッターに絵を描くという案も数年前にありました。したがって、そのような「正解のコモディティ化」をどう克服していくのか、それが今後のテーマになると思っています。

私が若い人に関して最も良いと思っているのは、20 年で同じところにたどり着けるという点で、最も素晴らしいことだと思っています。これだけ同時代意識を持てるので、そのような中で、いかにこれらの力を違う何かに変えていけるかということが最も重要だと思います。

鵜飼： 先程、塩見さんが言われたセンスはないのでしょうか。

塩見： センスは格段にあります。

鵜飼： センスはある。ヒバリのさえずりが素敵だと思う感覚はあるということですか。

塩見： あると思います。ないのは「先人知×若い感性」をどのようにつくっていくのかというところで、上手く言えませんが、「先人知×若い感性」は使える方程式なのに、先人知を持った大人がいなくなっているという問題と、「若い感性」をまだ世の中が活かせていないという問題があるのかも知れません。「若い感性」についてはバトンタッチしたいと思います。

鵜飼： では、小林さんに「若い感性」について伺いたいと思います。

小林： 私も若い人のうちかと思いますが、高校生の進路の相談にも乗っています。進路については、看護師や言語聴覚士、スポーツトレーナー等を希望する生徒が多いのですが、なぜそれほど多いのかと不思議に思って尋ねてみたところ、「自分の親族が病気にかかって入院し、そこで看護師の方が優しくてくれた」というような話をしてくれました。ところが、先ほどの「正解のコモディティ化」かも知れないのですが、答えてくれたエピソードが皆同じなのです。その話自体は良いのですが、皆が同じというのは変だと思います。

鵜飼： （エンデの「モモ」の）「灰色の人」みたいな感じですね。

小林： 「人の役に立ちたい」というのは良いことなのですが、それが唯一の絶対解みたいに思われるのも変です。

あるいは、20 歳の成人式の時に将来について聞くと、皆ほとんど同じようなことを答えます。私の時代には「社長になる」とか「宇宙飛行士になる」とか「町長になる」とか、よく分からないけれど漠然とした大きな夢を語って、結局は夢破れて粛々と生きていくという感じでしたが、そういう点では、最近の若い人は現実的です。それはもしかすると、これまで行ってきた進路指導のあり方が違っていたのかもしれません。

鵜飼： 進路指導については言いたいことがあるので、また後ほど伺いたいと思いますが、先ほど塩見さんが言われたように、若い人たちがベテランの方々の知恵に出会う機会がなくなっているのでしょうか。

小林： あることはあると思います。ただ、それが自分の仕事とイコールでつながるのかと言えば、そこがまだ考えられなくて、テレビをつければ都会の様子が分かるので、保護者が「都

会へ行きなさい」と言って外に出てしまうと、先人の知恵がなかなか伝承されません。

鵜飼： そこに壁があって、そこを越えないと年配の方も、若い人もハッピーにならないと思いますし、このテーマの目指す新しいライフスタイルにはたどり着かないのではないかと思います。

それで、どうすれば若い人たちが、先人の知恵が大事だということに気付くのか、それを我々中間世代が言えていないと思います。私も言えません。しかし、地域の存在はとても大事だと思いますし、年配の方々からいろいろな話を聞いて共感するのに、それを若い人たちに伝えようとしても伝えられないのです。あるいは伝わらない。それはどうしてなのかと考えた経験はありませんか。

三浦： 私は結婚して 26 年ですが、子どもには恵まれていません。ただ、今の仕事で、飲食の 2 店舗に関しては学生が 20 人くらいいるので、学生とはかなりよく仕事をしている人間ではないかと思います。

しかし、我々の場合は仕事でお付き合いすることが多いので面接をします。面接をすると、そのようなことが伝わりにくい方かどうか、面接の経験値で大体分かりますので、逆に伝わる方としか仕事をしていません。それを選んでいるところがあるので、私が話すことはあまり参考にならないのではないかと思います。申し訳ありませんが、ギブアップです。

鵜飼： 伝わる人と一緒にいるので伝わっていると思うと思いますが、伝わらない人が大多数だと私は思います。塩見さん、いかがですか。

塩見： 例えば、面接に通った人が、核家族か、3 世代居住かというようなことがデータで分かるとよいと思いますが、どうでしょうか。

三浦： そこは経験する中で、3 世代でおじいさん、おばあさんと一緒に生活している人、あるいは同居していなくても近くにいるという人はコミュニケーション能力が高いということが後から分かってきました。ですから、そこは結構ポイントにしています。

鵜飼： 3 世代居住をしている人は良いのですが、問題はしていなくて核家族になってしまって、おじいさん、おばあさんと接する機会が少ない方々に対して何か方策はないかということです。小林さんに一言お願いします。

小林： 島根県は幼い頃から「ふるさと教育」を行っていて、邑南町の場合は「地域学校」という取組みをしています。それで、アンケートで「地域が好きか」と問うと、9 割近くが「好き」と答えます。しかし、「地域の行事に関わったことがあるか」と問うと、関わったことがある人は 4 割くらいというのが現状です。

先ほどの核家族か、3 世代なのかということに関して言うと、もしかすると役割の与え方も 1 つの要因ではないかと思います。地域が好きで、地域に残る子どもたちの特色として、多くが神楽をやっています。神楽は高齢者がやって、その次の世代もやって、自分たちもやるという形になっていて、それは口で伝わるものではないので、一緒にやって見せるわけです。「子どもだからダメ」「これはやってはいけない」と言ったり、習い事として完全な状況をつくり出したりするのではなくて、ある種の不足分のあるところに子どもたちの役割があって、そこに子どもが参画して、「子どもたちがいないとできない」という形にすることが大事ではないかと思います。

鵜飼：　不完全さが大事だという話は、他でも聞いたように思います。ただ、神楽のようなものがあるところはよいのですが、ないところが多いと思いますので、そういうところはどうすればよいのでしょうか。塩見さんの言われる先人知と若い人たちのイノベーション、新結合が起きるにはどうすればよいのでしょうか。答えは出ないかも知れませんし、私も分かりません。

＜ライフスタイルのシフトへ向けて＞

鵜飼：　「人生 100 年時代の働き方、暮らし方」というテーマで話を伺って、働くこと、生きがいが大事だというニュアンスを受け取れましたが、今回のメンバーは「食」と「農」のメンバーなので「食」「農」「生きがい」「健康」がつながっていくのではないか、それで人生 100 年時代の良いライフスタイルになるのではないかと思いました。さらに小林さんは「環境」という話をされましたので、「食」「環境」「農」「生きがい」で「健康」になるというような話ではないかと思います。

「農」に関して、国土保全という大きな話をすると、農地を守っていく、農地に携わっていかなければ、日本の風景は山林に戻ってしまいます。「山林でも構わない」という話もあるかも知れませんが、人間が自然と共生する里地里山の状況を維持しなければ、日本的な「らしさ」はなくなってしまうのではないかと思います。

しかし、そういう「農」の役割を継承していくには、圧倒的に人が足りません。ライフスタイルの中に「農」があるのは素敵なことだというのは、塩見さんの本を読むと分かりますが、そのようなライフスタイルにシフトするにはどうすればよいのでしょうか。どうすれば「農」に携わる人が増えるのでしょうか。

先ほど、小林さんがお父さんの話をされましたが、私の父親は農学部を出て某菓子メーカーに入り、リタイヤ後はゴルフと料理をするくらいで、家に引きこもるという状況でした。そのような暮らし方が変わっていくような施策をしなければならないのではないでしょうか。

つまり、「お父さんの暮らし方」に社会の歪みみたいなものが出ているのが分かっているのに、対処療法的に解決しようとしてもダメだと思います。根本的にこのテーマにあるような「ライフスタイルのシフト」という形で変えていく必要があると思いますが、そのためにはどうすればよいのかという話です。

三浦：　具体的な話になりますが、先ほど塩見さんが言われた「先人知×若い感性」が最も出会う場所が、農村や第 1 次産業の現場ではないかと思います。その中に塩見さんが書かれていたような「農と IT」等が生まれていて、逆に言うと、第 1 次産業の分野は後継者不足などの問題からそこが手つかずの状態だったので、そのようなところのマッチングがあります。

さらに、今のマッチングは 1×1 という形が多いと思いますが、塩見さんが考えられているように掛け算を 2 つに増やす、3 つに増やす、もしくは足していく等、もっと複雑な方程式にしていかなければならないと思いますし、しかもそれが、今、求められている時代ではないかと思います。

奈良県で言いますと、今、地方創生を担っている行政研究者、クリエイター、メディア、農家、我々のような経営者、食に対する人間で 80 人のフォーラムをつくっていて、3 年間毎月行っています。

鵜飼：　それは県レベルですか。

三浦：　民間レベルです。実は私の主催なのですが、なぜ民間で行うかというと、選りすぐりの人を選びたいからです。それだけです。いろいろなものをつくる時には、その方法がかなり

早いのです。一番星をつくれば、あとは勝手に皆が手を挙げて二番星ができていきます。

具体的な足し算 2 つとか、掛け算も入れるとか、そのような方法で言うと「Next Commons Lab」(以下 NCL)という取組みがかなり近いのではないかと思っています。NCL は総務省の地域おこし協力隊のスキームを使って、地域おこし協力隊のように給料を支払う代わりにそれがその地域に行くというものです。地域おこし協力隊は、まさに邑南町のようにスーパー公務員がいて成果を挙げているところもある一方で、行政の担当者にただの便利屋として使われて疲弊するだけで全く意味をなさない事例もたくさんあります。

しかし、そのような様々な弱点を持ちながらも地域おこし協力隊は続いているので、その上でつくったプログラムが NCL であり、次の資本主義の実験です。これは簡単に言うと、先ほど「食」「農」「生きがい」「健康」「環境」の 5 つの分野が一元化しなければならないという鵜飼先生のお話がありましたが、そこに「移住社会」「起業」「観光」という要素を盛り込んでいます。

そして、出口を決めます。総務省のスキームを使い、地域おこし協力隊として地域に来るわけですが、3 年以内にその地域で起業します。例えば、奈良の山間地域は獣害があるとか、未開発の観光資源があるというような、その地域にある課題を事前にリサーチして、それを基に起業できる方々に来ていただき、そこに総務省の税金を投資して人材育成を行っていくのです。

つまり、若い方々がそこに定着するかどうかは、仕事があるか、ないかという大きな問題に掛かっていますし、同時に、その仕事が地域の課題を解決する社会企業であれば地域にとってもプラスになります。恋愛が起こりやすくなるわけです。

移住する人間と受け入れる側でよくある問題が、どちらがどちらに合わせなければならないのかということです。しかし、どちらかがどちらかに合わせ過ぎると、恋愛と同じで破綻すると思います。お互いに気を使うことが、これからは必要な時代になると私は思っています。恋愛と一緒で、恋愛をするもしないも自由ですし、どうせ恋愛をするなら相手のことを考えなければ上手くいかないと思います。地域づくりもそのようなフェーズに入っていると思います。

今、NCL の取組みを検索していただくと、遠野や奈良が出てきますが、なかなか面白い仕組みではないかと思います。

鵜飼: NCL に多世代で関わることはないのですか。選抜メンバーですか。

三浦： 人数制限は特にないので、多世代でも関わっています。むしろ、その方が持っている理解度や、この地域で生きていきたいと思っている気持ち、あとは起業しなければならないので、それを実現できるだけの能力を持った方ということになります。

鵜飼： 年齢は問わないのですか。

三浦： 問いません。奈良の場合は、ロート製薬が奈良県発祥の企業ということで、奈良県と宇陀市と協定を結び、コーディネーター等の人材を出してくれる等、ノウハウを入れながら様々なフォローアップをしていただいています。そのように、発祥地ということで民間の力も頂きながら事業を行っていっています。

鵜飼： 地域の農業をどうするのかという話で、塩見さんどのように思われますか。

塩見： なかなか難しいことですが、例えば、大学の授業で農業の年表というのがあって、

「DASH 村」が何年にスタートしたのか、漫画「夏子の酒」が何年に出版されたのか、「となりのトトロ」が何年に出たのか、雑誌「田舎暮らしの本」が何年に出たのか等が分かるのですが、それを見ていくと確実に農的な発信は増えています。林業系も食育系もありますが、まだまだだと改めて感じています。「DASH 村」だけを見ても、それでファンができたと思いますが、まだ農への敷居は高いと思います。「農は大事だ」と皆思ってはいますが、「農をやる」ということになると難しいということです。

鵜飼: 「農は大事だ」と思っているのですか。

塩見： 例えば、滋賀県立大に行く人も多分そうですし、圧倒的にそのような人が増えていて、大学生の卒論も都市より農村系のものが増えています。そのように関心は高いけれど、まだまだ取り組むには敷居が高いということです。

鵜飼： 敷居が高いというのは、農地の取得の話や農家になるという話ですか。

塩見： 1 回来させると、多分、面白味が分かるのですが、そこまでが難しいわけです。

鵜飼： 一歩踏み出せないということですね。

塩見： そうです。そういう意味でまずは交流観光（出会いの場づくり）のようなことが必要だろうと思います。あるいは、中学校、高校で農家民宿に行った人たちが今は大学生、20 代になっているので、確実に次の世代にそういう傾向は出てきていると思いますし、親が「半農半X」を読んで、子どもがようやくバトンタッチしてそれを読んでくれている等、かなり良いところまで行っているはずです。

それをもう少し先へ進めるためには、やはり三浦さんのお店や AJIKURA のような発信基地、ベースがとても重要です。綾部もかなり増えたと思いますが、まだ面展開には至っていないと思います。しかし、良いところもあって、確実にこの 20～30 年で変わっていますので、次の段階に来ているのだろうと思います。

鵜飼： 仮に「農は大事だ」と若い人たちが思っているけれども、一歩が踏み出せないという話であれば、どうすれば踏み出せるのかという話になりますね。

塩見： やはり、ここで話すことも「正解のコモディティ化」で、ありふれたことしか言えないというのが現状ではないかと思います。

鵜飼： 何かイノベーティブな言葉が閃かないかと思っていますが、閃きません。

個人的な話ですが、私の娘は東京の大森でプランター農園をやっています。民間企業で人材派遣のコンサルタントをやっていますが、やはり、土に触れる場所が大事だと思っているようです。

塩見さんが言われるように、このような農的なものに対する意識は、我々の時にはなかったと思います。「都会へ行って、大企業で働く」というのがスタンダードな働き方という感じだったので、あまり農的な気付きはありませんでしたし、私も気づきませんでした。それが、農的なものに対して気付いている子どもたちが多くなっているというのは 1 つの朗報であり、良い流れだと思います。

そこでどうするのかという話になると思いますが、小林さん、ここでイノベーティブなアイデアを出してください。

小林： 実は邑南町でも、先ほどの NCL と同じような仕組みの「食の学校」「農の学校」とい

うものがあって、料理人として「耕すシェフ」という研修制度を地域おこし協力隊で使って、その研修費で起業まで行います。今、それで 3 件ほど起業していますが、その形をさらにグレードアップしたものが NCL ではないかと思っています。そのように、人材を育成するという視点で、私も教育の現場で農業も扱っています。

邑南町の農業がどのような農業なのかと考えると、私はアグリカルチャー＝文化だと思っています。農業の「業」は産業ではなく、まさに生活に密着したものです。北海道で地震が起きた時、寺本英仁さんは鹿部町にいたのですが、農家の方がコンビニへ走って行ったと聞きました。あれだけ「北海道は農業の国」と言いながら、食材を調達するのにコンビニへ走り、コンビニから商品がなくなってしまったのです。

もし、邑南町で地震が起きて、3 本しかない邑南町へ入る道が閉鎖されたとしても、邑南町の人たちは生きていけると思います。そのくらい、少ロットながらもいろいろな品種を育てていますので、自分たちで消費する分くらいは何とかなるような気がします。ですから、北海道は TPP と戦わなければならないけれども、邑南町は戦わなくてもよいのではないかというのが私の思うところです。

私が今関わっているのは寮、つまり寄宿舎で、県外から約 70 名の生徒が来ています。この 70 名が毎日食事をするわけですが、その野菜は地元から仕入れます。それで、県外から毎月約 3 万円の寄宿舎費が入ってくるので、50 人分で約 150 万円が毎月邑南町に入ることになります。そして、それが町内に分配されます。

その分配に関して、今考えているのは、若手の農家と個別契約をして、若手で頑張ろうとしている農家にお金が行き届くようにしたいということです。ただ、まだそこまではできていません。もちろん、揃わないものもあるので、それは島根県の中で仕入れたいと思っていますが、できるだけ町内のものを買って、経済活動の中に乗せていくことが一番大事ではないかと思っています。

その他、今、私も授業をつくっていますが、土地に触れる経験や農作物を商品化して、それが売れるとまた次の商品を作るという仕組みにしていきたいと思っています。今、お手元にあるニンジンは生徒が作ったものです。

鵜飼：　それらは、今、購入できるのですか。

小林：　できます。このようなものを作って売れることが成功体験になります。人の役に立つということが大事だと思います。

鵜飼：　「農」だけではなく「食」など、仕事として回るような仕組みをつくっていかなければならないと思いますが、かなり時間がなくなってきているような気がしますので、もう少しピッチを上げて転換していかなければならないのではないかと思います。それによって、暮らし方も変わっていくのではないかと思います。

邑南町の取組みは先進的な例で、子どもたちが今後どのような暮らし方をしてくれるのかが楽しみですが、一方で、現状は少子高齢化で非常に困っている農山村の暮らしがあるので、それを何か上手い形にできないかと思っています。

最後に、宿題にしていました「人生 100 年時代の働き方、暮らし方」の提案を 3 人の方から話していただきたいと思いますが、その前に会場から質問があれば受けたいと思います。

雑多な話で「答えが出ていないのではないか」と怒られるかも知れませんが、どうでしょうか。フロアーの A さんも先進的な取組みをされていますが、いかがですか。

A：　本日、いろいろと話を聞かせていただいて、やはり、自分の力をベースに生き抜くとい

うことを言われている気がしました。

私もサラリーマン時代は 40 年ほど流通業で働いてきましたが、パーマカルチャーに出会って、パーマネントなアグリカルチャー、持続可能なアグリカルチャーが必要だと学び、サラリーマンを辞めて今の仕事をするようになりました。

現在は、鵜飼先生が言われたような小屋暮らしを始めています。母屋はありますが、電気やガスを切って、有事の時でも生きていけるような暮らしをしています。私は 72 歳ですが、できるだけ今まで背負ってきたものをシンプルにして生きていきたいと思っており、どこまで自分がシンプルに生きられるのか、挑戦しているという感じです。

私はこのような考え方をしていますが、本日、いろいろと話を伺って、さらに認識をしたというところです。ありがとうございました。

鵜飼： B さん、まさに困っている農業についてコメントを頂けますか。

B： 他県でサラリーマンをしながら農業をしていますが、今、困っているのは人がいない、後継者がいないということです。

その一方で、国の施策で農地が集約化されて、農業法人という形で農業をしていくようになると、昔のように家庭でやっていたような農業への取組み方ではなくて、無責任な取組み方になってしまうので、どのようにして農業法人や農村を維持していくかということが大きな課題になっています。

そのような中で、本日、このような話を聞きながら、やはり、一人ひとりが自分の時間を大事にしなければならないと言われていますが、田舎に住んでいると地域のしがらみや、いろいろな義務などがあって、そのようなことに取られる時間が多いために、農村を守ることが全然続かないという状況になっています。そのようなところで、本日の話は非常に面白かったと思います。

鵜飼： 実務者からコメントを頂いて有難く思います。

＜人生 100 年時代の働き方、暮らし方の提案＞

鵜飼： 最後に、3 人の方から「人生 100 年時代の働き方、暮らし方」についてご提案を頂ければと思います。

三浦： 今年は国連が定める国際家族農業年の「プラス 10(テン)」のキックオフイヤーです。2014 年に、世界の食糧不足を賄うためには小さな農業、地域農業、市民農園等が必要だということを国連が認めましたが、成果が出なかったので、新たに今年から 10 年間の「プラス 10」が始まるということです。

私は 2013 年に『家族野菜を未来につなぐ』という本を学芸出版社から出したのですが、山崎亮さんの『コミュニティデザイン』と同じ出版社、同じ担当者で、情熱大陸に出るところまで全部一緒だったので、多分 5 万部くらいは売れるのではないかと思っていましたが、5000 部しか売れませんでした。

私はもっと「小さい農業」、塩見さんの「半農半 X」というものが普及すると思っていましたが、その時に、もしかすると「農」について考える場合、大きな「農」を想定せざるを得ない方も多いのではないかと思いました。

そこで、私からの提案は、1 つプラスということで言うと、塩見さんとご一緒させていただいているので、「半農半 X」＋小さい農業という形で、プラスαのところを「小さい農業」にしても面白いのではないかと思います。

もっと小さい農業をスタートしていくことによって、入りやすい小さいところから大きく

なる方もいるでしょうし、今、大きい「農」をやって大変だと思っている方が、段々と小さい「農」に分散していくという、1 つの土壌にもなっていくと思います。このようなことをしなければ、最後は古代ローマ人の「運命は歩む意思のある者を先導し、意思なき者を力ずくで引き立てる」という言葉のように、力ずくで引き立てられる時が来てしまいます。ですから、できる限りは準備をしておいた方がよいのではないかと思います。

本日はありがとうございました。

小林： 「人生 100 年時代」というテーマですが、「人生あと 1 年」と考えればどうかというのが、働き方、暮らし方を考える上でのヒントになるのではないかと思っています。先ほどの紹介で最後に言いましたが、「自分が一番大切にしたいことは何か」ということを突き詰めていくと、人生が 100 年でも、20 年でも、1 年でも、満足した人生を送れるのではないかと思っています。自分が 100 歳になった時に満足した瞬間が訪れるのではなくて、明日とか、今この瞬間に自分の満足する瞬間が訪れれば、100 歳になった時に「満足な人生だった」と言えるのではないかと思うので、地域やいろいろなしがらみがあったとしても、その中で自分の楽しみや満足できることを見つけていくことが大事でないかと思います。

また、すべてを自分で切り拓いていくことはできないと思うので、流れに任せた時に「ここは楽しい」「ここは苦手だ」と思うことがあれば、楽しいことはやればよいし、苦手なことは人に任せればよいのではないかと思います。全員がそのようになってしまうと、誰も農業をしないという事態になりかねませんが、1 つの考え方として、「人生あと 1 年」だとしたらどのような働き方をするのかというところで、自分の今やるべきことは何かを考えればよいのではないかと思います。

塩見： 昔考えた言葉を思い出しました。それは「食の自給」と「夢の自給」という「2 つの自給」です。日本は夢の自給率が低い可能性があります。それから、自給と他給です。100%自給する必要はないので、自給と他給の組合せがとても重要だと改めて思いました。

今から言うことは全く関係のないことですが、私が AI 時代に対してつくった言葉が「ひとり AI」です。長老から聞いた凄い話と、たまたま読んだ民俗研究家・宮本常一の本に書いてあること等、いろいろなものをインプットしていけば、オリジナルの答えをアウトプットできると思うので、「ひとり AI」のような考え方をスタンダードな考えにしていくことが重要ではないかと思います。

「1 人 1 研究所社会」からノーベル賞をとる人も出るだろうし、小さな研究でも生涯やっていけばオリジナルの方程式が出ると思っているので、そのような 100 年時代にしていきたいし、私はしていきます。来年は「半農半 X 研究所」が 20 年になります。コツコツやれば 20 年続くということで、次の目標は 30 年ですが、10 年、20 年、30 年続けていけば、必ずオリジナルな何かの小さな発見があると思うので、それを推進したいと思います。

鵜飼： 今日から皆さん 1 人 1 研究所ですね。ありがとうございました。

いろいろとキーワードや示唆を頂いて、私もまだよく分かりませんが、小林さんが言われたように、100 年と言わずに「1 年をどう生きるのか」という考えを積み重ねていくことが大事だと思います。タイトルを 100 年にしてしまったのでこのような話になってしまいましたが、積み重ねが大事だという話と、自分の主体性、自分の大事なものは何かということを確立して

いくことがとても大事な話なので、年配の方も、若い人も、それぞれの立場、それぞれの価値観で、何か「芯」を持ってもらいたいと思います。そして、それを堂々と主張しながら生きていただければと思っています。

取りとめのない話になって恐縮ですが、時間が参りましたので、これでパネルディスカッションを閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

司会： ありがとうございました。パネリスト、コーディネーターの皆さんにもう一度拍手をお願いいたします。

最後に、日本計画行政学会関西支部の副支部長で、龍谷大学国際学部の壽崎先生から閉会のご挨拶を申し上げます。

■ 閉会の挨拶

日本計画行政学会関西支部副支部長
壽崎　かすみ　氏

副支部長を仰せつかっています龍谷大学の壽崎です。本日は G20 で警戒の物々しい大阪でいろいろと交通事情等ご不便もあったかと思いますが、朝早くからお出でいただき、最後までお付き合いをいただきまして、本当にありがとうございました。

最後のシンポジウムは「人生 100 年時代」というテーマで、なかなか簡単には「どうすればよいか」と言える問題ではないことが改めて分かったという感じがしますが、1 つだけ言いますと、今の議論でワークライフバランスの話から何からすべて、基本的には男性目線だと思いました。

ワークライフバランスに関して言いますと、私は子どももいて、ずっと仕事をしてきましたが、子どもに振り回されていた頃は、自分の時間は電車に乗っている間だけでした。子どもが寝るとこちらも疲れ果てて寝ていましたし、バランスも何もない、どうにか 1 日を回すので手一杯でした。

それで、100 歳まで生きられることになって何ができるのか、何をするのかというと、男性の皆さんは 60 歳とか 65 歳までに仕事を充分されて、その後に何かをするのかと考えられているのかも知りませんが、私も 50 代になり、子どもも手を離れたので、娘が結婚して孫が生まれても孫の面倒などは絶対に見ないし、ここから先は私の時間で、自分の好きなことしかしたくないし、今までにし損ねた研究を気力と体力のある間はしたいと、それしか考えていません。

それでも 100 歳まで自分が生きられるとは思っていません。女性の平均寿命は長いと言われますが、あくまでもそれは専業主婦をしていた場合の平均寿命で、男性の平均寿命が短いのはストレスがかかって、それが病気の原因になるからだという話があります。そうすると働き続けた女性は、シングルの場合は分かりませんが、子どもがいて働き続けた女性は、並みの男性以上のストレスがかかっていると思うので、元々の体力差なども考えると男性の平均寿命までも生きられないのではないかと思います。そうすると、あと何年あるのかということになるので、100 年などという心配は全然する必要はなくて、やりたかったことが終わらせられるのかと、人生カウントダウンモードでいます。

鵜飼： あと 1 年を考えればよいと思います。

壽崎： あと 1 年で死んでしまうと、「私の人生は何だったのか」となってしまうので、あと 1 年とは言いたくなくて、「何か微妙だ」という気分で最近は過ごしています。

女性の立場からすると、そのような見方があるということです。このようなシンポジウムではいつも「女性もパネリストに入れてほしい」という意見が出ますが、なかなか適任の方がい

ません。そもそも、それもどうなのかという話になってしまいます。

これから 5 年後、10 年後、先ほど言われていた若い人たちの代になったら、パネリストの半分が女性になって、客席も半分女性になるような時代になってほしいというのが私の唯一の希望です。

とんでもないことを話しましたが、今、ここにおられる若い女性の皆さんには、私の時よりはかなり時代は変わっていると思うので、頑張っていただきたいと思っています。

今、政府が言っている少子化対策が進まないのも、結局はそのような状況が原因だとしか思っていませんので、少子化対策を考える時にはそのような心配もしてくださいということで、一応、計画行政としては「人口減少に対して何を考えるのか」という話で終わったということにさせていただきたいと思います。

本日は、本当にありがとうございました。

司会： これをもちまして 2019 年度の研究大会を終了させていただきます。熱心にご議論いただきまして、ありがとうございました。

以　上